

活用事例⑧

島根県立出雲養護学校
倉橋 亜弥・山本 恵美子

■活動した学年：小学部1年～3年
(希望者)

■主障害名：知的障害

■各教科等名：図書館(読書)活動、
おはなし会

■学習形態：一斉視聴

■本の名前：

『コッケ モーモー!』(紙芝居風)

■対象となる児童・生徒の実態

毎月2回、昼休みを利用したおはなし会を実施し、楽しみにしている児童も多い。中・低学年の参加が多く、絵がはっきりしていて繰り返しのある絵本を好む傾向がある。そのため、今回は「わいわい文庫」から『コッケ モーモー!』(紙芝居風)を選び、この季節に合う『どんぐりころちゃん』(正高もとこ/鈴木出版)とともに、おはなし会で利用した。

■学習のねらい

- ・本を読んでもらう機会を通し、本を身近なものに感じ、読書の楽しさを味わう。
- ・さまざまな内容やジャンルの本に触れ、自分の思いを伝えるための表現力の基礎となる言語感覚を磨く。

- ・おはなし会という不特定多数が集まる場所に慣れ、一緒に楽しむことができる。

■使用した道具・機材

プロジェクター、パソコン

■実際の様子について

- ・おはなし会の予告チラシに今回取り上げる2冊を紹介し、当日は職員朝礼時に告知し、参加を促した。
- ・おはなし会で「わいわい文庫」を利用するのは初めてで、色彩豊かな『コッケ モーモー!』のページがスクリーンに大きく映しだされると、子どもたちはその迫力に興味津々の様子だった。今回は低学年の参加が多かったが、お話が始まると画面を注視して、お話に引き込まれている様子が伝わってきた。
- ・「大画面でみんなが楽しめた。読み手が代わったり抑揚のある語り口もあったりして、面白かった」など参加教員の感想もあり、今後のおはなし会での利用に手応えを感じることができた。

■本に対する情報提供など

- ・大きな画面に興味をもち、子どもたちが集まってきて、ふだんよりもおはなし会への参加が多かった。
- ・「わいわい文庫」には子どもたちが楽しめる絵本や昔話がたくさん収録されていることが分かった。
- ・また、『どれを食べたかな』など楽しい企画の読み物も収録されているので、今後はおはなし会だけでなく、いつでも一人読みできるタブレットの利用もすすめ、読書の楽しさを伝えていきたい。



コラム 「本っておもしろいな!!」

大阪市立菟田北小学校 岡室 雅彦

「本っておもしろいな!!」

わいわい文庫を利用して、4年生の彼が、一冊の本を一人で読み切ったときの言葉です。文字を読んだり書いたりすることに困難さのある彼にとって、図書の時間は、挿絵を見て過ごす、退屈で長いつらい時間だったと思われます。

彼が最初に読んだ本は『おとうさんはウルトラマン』。100冊以上入れてあるタブレット端末から、「これが読みたかってん!」と躊躇なく選びました。

タブレット端末を見つめる顔は、なにやらにやけていて、時折大きな声で笑い、気にいった場面を何度も何度も再生していました。

後日、保護者から伺った話によると、この本は何回も何回も学校から借りてきていたそうです。

「字が読めないのにどうするんだろう」と思われていたそうですが、ある日、本の内容を嬉しそうに語る彼を見て驚かれたそうです。わいわい文庫を利用した後のことでした。

「先生!貸してください!」と図書の時間の前に、彼がタブレット端末を取りにやってきます。

もう図書の時間は、挿絵を見て過ごす、退屈で長いつらい時間ではありません。イヤホンをつけ、タブレット端末を机の上に置き、時にはにやけて、時には真剣な顔で読書に没頭しているそうです。

返ってきたタブレット端末を見れば、今日とはどんな本を読んだのかがわかります。「ああ今日は、前の続きを読んだのか」とか、「おお、ページの多い本に挑戦したのか」など、それを確認することが私の楽しみとなりました。

【読書=字がいっぱい。読めない。意味が分からない。=拒否】になっていた彼が、読書の楽しさに引き込まれていくのが手に取るようにわかりました。

今度は「他にもっとおもしろい本ないの?」と言う、彼の言葉が聞きたくなりました。